更生保護女性会会長賞

学校という「小さな社会」から

堺市立　白鷺小学校　六年
松　本　晶　途

学校は、勉強するための場所である。しかし、国語や算数などを学ぶだけの場ではない。人との関わり方や年上、年下との接し方など、社会での生き方を学ぶ場でもある。つまり学校は、「小さな社会」そのものであると考える。

例えば、暴言を吐く人がいれば、学校という「小さな社会」の誰かの心を傷つけることになる。「大きな社会」に出れば、それはもっと深刻なトラブルに発展する可能性が高い。冗談のつもりでも、言われた相手はきっと、何日も落ち込む。実際に、自分も一年生の時に、悪気なくきつい言葉を受け、今でもその相手は少し苦手である。言葉は、人の心に深く残り続けるものなのだ。

また、人の物を勝手に取ってしまう人がいる。学校では「ルール違反」で済むかもしれない。しかし、大人の社会では「万引き」や「窃盗」という立派な犯罪にあたる。どちらもほんの些細なことのように思えるが、その積み重ねが、社会を徐々に暗くしていく原因となるのではないだろうか。

もちろん、その中でも思いやりをもった人も必ずいる。落ちているものを見つけたらすぐに拾い届けられる人。誰かの間違いをやさしく伝えることができる人。誰かが失敗したとき笑わずに励ましてあげられる人。

最近も、そのような場面を見た。ある日、美化委員会の仕事中に階段を下りていると、同級生同士が廊下で軽くぶつかっていた。その瞬間、二人で同時に「ごめん」と言って去っていった。その当たり前のように思えて、実際にはなかなかできない行動には、温かさと思いやりが感じられた。

小さな優しさや気づかいは、見えないところで積み重なって、社会を明るくしている。当然、全てが学校と社会で同じとは限らない。しかし、「思いやり」や「ルールを守る心」、「自分の行動に責任を持つこと」は、成長してからもずっと大切にしていくべきことである。

自分は「小さな社会」の中で思いやりのある行動をし、誰かの心を明るくする存在になりたい。今日の誰かの優しさが、明日の誰かを照らすことになる。だから、小さなことを大切にしなけれ

ばならない。「小さな社会」も「大きな社会」も明るくするのは特別な誰かではない。一人ひとりの行動が、未来を少しずつ、確実に照らしていく太陽になると信じたい。